

広島高校生平和ゼミナールの学習会 広島の若者たちが受け継ぐべきもの 加害と被害そして和解と友好

広島高校生平和ゼミナール世話人
広島地区高校生社会問題研究協議会事務局長
大亀 信行

広島高校生平和ゼミナールや広島地区高校生社会問題研究協議会の高校生たちは、学校間を越えた学習会を定期的に開いています。今年の前半の主な取り組みは、2月9日ウィンターゼミ：広大名誉教授 佐藤清隆先生「お金の心配をせずに学べる世の中に」、3月19日「卒業生を送るつどい」、4月25日合同学習会：「卒業生アワー」、5月3日「憲法ミュージカル」、5月30日合同学習会「安野発電所への中国人強制連行の歴史と和解について」講師：川原洋子さま、6月20日合同学習会：崔仁哲先生（広島朝鮮中高級学校）「在日朝鮮人の歴史と現状について」中西誠先生「十五年戦争と高暮ダム」（安田女子高校）、7月18日「住吉克子さまの被爆体験」は天候不順で延期しました。7月30日原爆瓦の発掘：元安川、8月1日くすの木苑ボランティア、8月5日原爆犠牲ヒロシマの碑第38回碑前祭、8月6日せこへい（世界の子どもの平和像）前集会、8月10日～18日せこへい美術館：（旧日銀広島支店）、9月1日「第22回高暮ダム朝鮮人犠牲者追悼碑前祭」等です。

5月30日の合同学習は、川原洋子さん（広島安野中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会）による「安野発電所への中国人強制連行の歴史と和解」と題した講演をお願いしました。参加者は崇徳高校平和研・新聞部・ESS部、安田女子高校社研部・国際学院高校社研部の生徒20名と引率教員等7名でした。

川原さんのお話の前に安田女子高校の中西先生が、日韓の徴用工問題や日中15年戦争下における強制労働・強制連行について概括されました。併せて高暮ダム朝鮮人犠牲者追悼碑の建立の経緯と平和ゼミ高社協の関わりについて説明されました。

川原さんは強制労働強制連行の問題は、戦後74年を経緯しても未解決の大きな問題であることを示されました。政府・軍・企業が行った犯罪行為により日本国内135カ所で7000人もの中国人が死亡した事実を説明。広島県山県郡安野村坪野（当時）に建設された安野発電所建設工事（起工1943年）の実態を紹介されました。DVD「50年目の叫び」では、受難者（幸存者）の声を聞くことができました。川原さんは「安野中国人受難之碑」の建立は企業と受難者の間で和解が成り立ち得ることの一例として、その意義を説明されました。生徒たちは何を受け止めようとしているのか、二人の感想文を添付します。

崇徳高校2年U君

1、今回このような話を聞いて思ったこと、感じたこと

今回聞かせてもらった「安野発電所への中国人強制連行の歴史と和解について」感じたことは、この悲惨な出来事があった事を決して忘れない、そしてこの話を風化させる事なく後世に伝えていこうという事です。何よりこの講演の中でDVDの印象はとても大きく当時どのようなことがあったのか、その後どうゆう活動を行ってきたのか実際に強制連行にあっていった人々の話を収録したもので、聞くだけで

も生々しいものでした。作業中、事故で手や目を失ったり、日本人から虐待を受けたり十分な食べ物を貰えず、栄養失調になったりと現在では考えられない程、悲惨な時代でした。又人権のなかった当時と現在のギャップはとても大きく人権はどれほど重要で大事なもののなのか改めて考える時間にもなりました。

2、今後どのようにつながっていくか

今回の安野発電所は裁判で決着が決まらなかったもので和解で決着をつけたということは正解だったと、講師の先生はおっしゃっていましたがその理由が今回の話を聞いてとてもよく分かりました。僕は裁判で白黒を決めるのが一番だと思っていました。しかし今回の話でわかったことは、物事の決着は法だけで決めるのではなく、互いに譲歩するのも大切だと思いました。

又、平和研究部といえば原爆などが主にメインで、このような問題の勉強にあまり力を入れてきませんでした。ですが今回の合同学習会、又昨年にあったこれは朝鮮人の強制連行ですが高暮ダムなどを踏まえて改めてこのような出来事も勉強するということはとても大切だと思いました。そして僕らが今回このように勉強し学習出来、この出来事を風化させず、後世に受け継いでいけているのは、多大な努力、活動を続けて来られた講演者の川原さんのおかげです。なぜ伝承し続けているのか、そこから何を学ぶべきなのか、そのような熱い気持ちをしっかりと受けとめ、今後の活動、そして身近な所でも伝承していこうとおもいました。

国際学院高校 2 年 T 君

川原さんのお話を聞いていて最初に驚いたのは、中国人も捕虜として日本に連れてこられていたということでした。去年の夏、朝鮮高校の方々と高暮ダムでのお話を聞いて、朝鮮人が労働力として連れてこられた事は知っていましたが、中国人も来ていた

ことは知らなかったもので、初めは耳を疑いました。

しかし、中国人の方々が受けた、人間としての扱いとはかけ離れた虐待は、決して許されるものではない事を深く痛感した。

中でも、仕事中に目をやられ、自分で自分の目を潰したと証言した男の人の体験談は、正直、恐怖感しか感じとれなかった。

かなりの激痛が走るであろう行いを、その男の人は「むしろ痛みが少し静まった」とおっしゃられた。それ程までに、当時のその仕事場所の環境は最悪だったと伺えた。

M君が言ったように、日本は被害者だけでなく、加害者でもあるという事に、ハッとさせられた。日本人たちがした事は決して許されることではない。人を人として扱わないなんてことは、本来あってはならない事だ。そんな事を平気でさせてしまう当時の政府も恐ろしいし、そんな世界に変えてしまった戦争という脅威そのものが怖い。

こんなことにならない為にも、戦争は起こしてはならないのだと感じたし、戦争を起こさせないためにはどうすれば良いのかと、考えるきっかけになったお話だと思いました。

広島高校生平和ゼミナール 広島地区高校生社会問題研究協議会

広島高校生平和ゼミナールは、1978年に発足した高校生の自主的な平和学習サークルです。原水爆禁止世界大会の高校生分科会（その後、独立して全国高校生平和集会となり今年は第46回に到る）を準備する中から、生まれた学習サークルです。

広島地区高校生社会問題研究協議会は、広島地区高校生部落問題研究協議会を母体として発展継承している高校生のつどいです。共に学校の部活動や個人の参加で年間を通じて活動しています。これまでに両団体は協力して活動を繰り広げてきました。

7 ページより ⇒

反核平和ソング作り・ノエルベーカーの手紙運動（首相に国連で核兵器廃絶を訴えるように要請はがきを送る取り組み）・原爆瓦の発掘保存運動（この取り組みは原爆犠牲ヒロシマの碑として結実、1982年8月5日除幕）・被爆樹木の調査・原爆遺跡調査・朝鮮人強制労働強制連行の調査活動は高暮ダム朝鮮人犠牲者追悼碑の建立（1995年）に結びつきました。世界の子ども
の平和像の建立（2001年）は、せこへい美術館の取り組みとして継続しています。これら様々な取り組みを広げてきました。

すぐにできること・誰でも参加できること・仲間に呼びかけやすいこと・時代と結びついて
いることなどの特徴があったように思います。特にこの三つの記念碑の建設は、広島の高校生
たちが全国の仲間たちと共に切り開いた活動の到達点を示すものといえます。